

きじの暮らし～酒井明 説話集4※～

今回は「キジ」の暮らしについてお話してみます。

ペけんペけんとして山できじが鳴きました。

野良仕事の手を止めたおじいさんがつぶやきました。

「めったに鳴くなよ。猟師がどこで聞きよるやらわからんぞ」
近頃めっきりきじが少なくなったので、寂しくて仕方ないのです。

大豆畑やそば畑、さつま芋が少し太れば掘り出してつんつんやる。

ずい分悪さはしてくれるのが、雄きじが朝日を受けて胸を張り首を伸ばした美しさ、男らしさがおじいさんにはなんともいえない魅力なのです。

それになかなかの忍術使いの名人で、弾を受けて飛べなくなった時などに、一応そこらを走って逃げるが、小さな木株に草が一握りちょこんと乗ってれば、完全に中に隠れてしまうのです。相当慣れた猟犬でも見つけ出すことはなかなか難しい程です。

青草の中で腹ばいになり、ちょっと羽を広げてじいっとしている。誰が見てもまず、きじだとは気づかないでしょう。

縄張りを守る気持ちもなかなか強く、ほかの山からやって来た雄きじは、縄張りを守るきじの大將と力の限り戦うことになるのです。

今度は少々人が近づいても、そんなことはお構いなしです。負けた方は坐り込み、動くこともできなくなってしまいます。

そんな場面は滅多に見られませんが、あちらの山とこちらの山で、ペけんペけんとしてやり合っているような時は、どこかで大格闘が始まるかもしれません。

同じ仲間の間でも、ペけんペけんとして声高く鳴くのは大將のきじだけのようです。

自分たちの生活する範囲を大切にす鳥や獣はたくさんあります。きじの世界でも、そんな仕組みがずうっと続いている様です。

日本を代表する鳥の一つですので、おじいさんの大切にしたい気持ちがよく判ります。



※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。